

## 支部報告

## 関東支部2024年度シンポジウム「生成AIは色彩の専門家になれるのか？」

Report on the Kanto Branch 2024 Symposium : "Can Generative AI Become a Color Expert?"

日高 杏子  
Kyoko Hidaka支部幹事・芝浦工業大学  
Branch Committee Member, Shibaura Institute of Technology

フェイク画像を使ったニュースのように、生成AI（人工知能）の利活用には課題がまだ山積している。関東支部は、急速に普及した生成AIを色彩の視点から一考するシンポジウムを主催した。2024年4月6日に文京シビックセンターシルバーホールで、対面・zoom配信のハイブリッド方式で支部総会後におこなわれた。東支部長の開会挨拶で始まり、画像制作の視点から岩本崇氏、デザイン評価について浦谷勝一氏、法制面からは弁護士の松本健男氏の3名が解説、その後質疑応答で総括された。



上図：現地の岩本氏(左)・浦谷氏(中)  
リモートの松本氏(右) / 下図：会場風景



### 1. 岩本崇氏(アドビ株式会社)「生成AIを用いた色彩表現—生成AIがカラーコーディネーターする—」

Adobe Firefly を利用した Photoshop や Illustrator での生成画像の紹介が行われ、プロンプト入力による自動切り抜きや置き換えの実演があった。Firefly が生成する画像はそれぞれ独自で毎回異なり、まさに「一期一会」であった。また、安心して商用利用できるように、アドビ株式会社では機械学習の段階で著作権侵害になる画像は使っていないことや、著作権問題や炎上などが起こりうる画像を生成しないよう配慮されていることを説明した。

### 2. 浦谷勝一氏(コニカミノルタ株式会社)「脳科学に基づく色彩デザイン解析 —AIがカラーデザインを評価する—」

人間の認知特性を脳科学の面から分析し、データに基づいてデザインを数値化・最適化することで、マーケティングの成功につなげることを説明した。ニューロンの入力とシナプスの出力という人間の思考を、AIがシミュレートすることによって、消費者が潜在的に求める商品やサービスの推定が可能となった。この実例としてEX 感性のソフトを用い、訴求力の高いパッケージデザインを可能にして、売上アップにつなげたことを解説した。

### 3. 松本健男氏(大江橋法律事務所)「生成AIと著作権—生成AIを活用するために注意すべきこと—」

現時点では生成AIと著作権の問題は実務対応がまだ定まっていないことに留意すべきことである。冒

頭で著作権法を概説の上で、生成AIの利用について、学習に既存著作物が利用されている場合に、利用者も気づかずに既存著作物とよく似た物を生成してしまうリスクを指摘した。学習用データについて権利処理がされている生成AIを利用することもリスクを避ける一手段と説明した。

### 4. 質疑応答／総括

質疑応答では、人間の創造性とAIの両立についての意見交換、AI機械学習データの管理や生成物の利用範囲についての懸念が示された。色彩設計支援アプリ・サービスである Adobe Color についての話題も取り上げられた。

最後に基調テーマ「生成AIは色彩の専門家になれるのか？」の質問には、生成AIはコパイロット(副操縦士)であり、人間の創造性を高める一助ではあるが、最終的判断は人間側にあるという考え方が共有された。

日本色彩学会も刻々と進化している技術や著作権問題などに注視すべきであり、今後も専門家と実務家の知見と対話の継続が期待される。